

1 抑うつや不安感が背景にある

下部尿路症状に対する漢方製剤の使用経験

長崎大学病院 泌尿器科・腎移植外科

森 慎太郎、松尾 朋博、本多 弘幸、荒木 杏平、
光成 健輔、大庭 康司郎、望月 保志、今村 亮一

【背景】

下部尿路症状(LUTS)の原因は多岐にわたる。すなわち泌尿生殖器系の器質的異常のみならず、抑うつや不安などの精神的・心理的背景がLUTSの発症に大きく関わることも少なくない。このような症例では、西洋薬による治療のみでは対応に難渋する場合がある一方で、漢方薬が効果的なこともある。

今回われわれは、抑うつや不安感を背景とする患者で、夜間頻尿をはじめとするLUTSをも併存した症例に対して、加味帰脾湯(TJ-137)を投与した経験を報告する。

【症例1】

52歳女性。もともと心療内科にて不安症、抑うつに対してクロナゼパムおよびセルトラリンによる治療を受けていた。また、X-1年6月より近医泌尿器科で過活動膀胱に対して、ビベグロンが処方されていた。しかしながら、特に夜間頻尿の軽快を得ず、X年6月に加療目的に当科紹介となった。尿意切迫感に関してはビベグロンによる効果はあるものの、夜間頻尿に関しては強い不安感が原因となっている可能性が高いと判断した。まず四逆散(TJ-35)で治療導入するも夜間頻尿の改善には至らなかった。そこで、加味帰脾湯へ変更したところ、3回あった夜間排尿回数は投与4週目で消失し、現在も効果は持続している。

【症例2】

45歳男性。元来、当院精神神経科にて混合性パーソナリティ障害、双極性障害に対しクエチアピン、炭酸リチウムの投与を受けていた。会陰部痛、排尿困難、頻尿を主訴に当科紹介となり、前立腺肥大症および慢性前立腺炎/慢性骨盤痛症候群(CP/ CPPS)との診断に。タムスロシンとタダラフィルの投与、さらに前立腺マッサージにて対応した。マッサージ後は痛みや頻尿などの症状は一時的に緩和するものの持続的な効果は得られず、CP/ CPPSに対する不安も強かったため加味帰脾湯の処方を行った。治療開始後、IPSSは19点から15点へ改善した。特にCP/ CPPSに関して痛みや不安の軽減も認めた。さらに夜間排尿回数も4回から3回に減少した。

【結論】

抑うつや不安感などが背景にあるLUTS患者では、加味帰脾湯を使用することで、夜間排尿回数をはじめとしたLUTS症状を改善させる可能性があると考えられた。